



**飯館村振興公社(農業部門)**

農業部門設立から4年目。今年は昨年の約2倍にあたる約60haの水田で、食用米と飼料用米の田植えを行いました。米の生産と並行し、畦畔修復、ほ場の均平・深耕などを行い、さらなる農地の再生にも取り組んでいます。「これから村で農業をやりたいと考える人のためにも、休耕地を農地に戻しておくことが大事」と大井利裕部長(草野)。事業が拡大する中、「若手が技術を習得できるようにしていきたい」とその先も見据えます。水稻管理の委託を受けるなど幅広い需要にも対応していて、農繁期を中心に村の農業者の協力も仰いでいます。また、道の駅までい館前の花畑の管理も継続して受託し、観光の振興にも寄与します。



①約20人が農作業を担います。②現場に立ち担い手集団を率いる大井部長。③農業総務係長の志賀隆久さん。「農業に少しでも興味を持ってもらえるよう環境を整えていきたい」。

ライスサプール  
**株式会社RIESAPEUR**

新規参入!



只見町に本社を置く農業生産法人、株式会社RIESAPEUR。米や南郷トマトを生産し、只見町の地域おこしにも携わっています。

同社は、飯館村の農地で来年から米づくりを始める計画で、小宮地区に事務所を設置。今年は飯館村振興公社の農作業を一部請け負い、村の気候を体験しながらノウハウを蓄積していく予定です。この事業を進めるために、飯館村企業雇用型地域おこし協力隊の募集も行なっています。

RIESAPEURの目黒大輔さん(左)と目黒美樹さん。

株式会社ちーのは、国産バイオマスプラスチック(ライスレジ)などの開発・生産に取り組む株式会社バイオマスレジホールディングスの系列会社です。令和4年に浪江町に設立され、飯館村には支店を登記。原料となる米の生産をスタートしました。その後、国産プラスチック加工用に政府所有米を売り渡す国の制度ができたことから、現在は食用米を生産しています。

村では八木沢地区と関沢地区に約20haの農地を借り受け、主に主食用米「天のつぶ」を栽培していて一部は輸出用。浪江と飯館、2地域での営農を円滑に進めるため、関沢地区に事務所兼住宅も確保しました。

「地区の皆さんに応援をいただき、お世話になっています」と代表取締役の中谷内美昭さん。今後も農地を拡大し、「10年後には1000haに広げたい」と考えています(!)。栽培方法も先進的で、菌根菌を活用する節水型の農法でメタンガスの発生を抑制。サプライチェーンも巻き込み、レベルの高い脱炭素に取り組もうとしています。他にも、人工衛星から取得する地力や生育状況のデータを元にドローンが自動で可変施肥を行うシステムを導入するなど、さまざまな技術を取り入れ、「産業として農業を発展させたい」と取り組みを進めています。

**農地所有適格法人  
野良仕事集団  
株式会社ちーの**



村民とつながり営農に取り組む中谷内さん。

農地中間管理事業を活用して農地の集積が進められるのも、担い手の皆さんのチャレンジとたゆまぬ努力があつてこそです。 **担い手の活躍**



**農事組合法人  
13区営農組合**

上飯樋地区(13区)の住民有志による任意団体として平成27年に発足し、令和元年に法人化。地域の農業の再生・振興に大きく貢献し、令和6年9月には第65回福島県農業賞「復興・創生特別賞」を受賞しました。

組合員は8人。農地中間管理事業を活用し集積された農地で、米(稲発酵粗飼料(WCS)・飼料用米)、大豆、デントコーン、牧草などを生産。取引先を開拓し耕畜連携を推進してきました。また、畦畔修復などの作業も受託。安定した経営を続け、村内の大規模農業を牽引しています。

現在約150haの耕作面積を、2年後には200haまで広げる計画で、食用米の生産にも取り組みたいと考えています。若手の補強を進めながら、作業を効率化して休日を確保、大型連休や家族ぐるみの社員旅行も実現しています。



①ユニフォームの作業着で。②ブームスプレーヤーでの作業。オペレーターの確かな技術が大規模農業を支えます。③代表理事の細川強さん。無線連絡で細やかに作業を調整します。



**高野森夫さん**

飼料用米を中心に稲作に取り組む高野森夫さん(関沢)。息子夫婦の博文さん・友紀さんと共に農業に励んでいます。

避難先の福島市で食用米の栽培を始めた高野さん。村内では平成30年から、飼料用米「ふくひびき」の栽培をスタートしました。毎年稲わらを田にすき込み、播種時の施肥、背負い動力散布機による追肥も行い多収を実現。農林水産省などが主催する「令和5年度飼料用米多収日本一コンテスト」で全国表彰を受けました。また、ドローンを所有し除草剤散布を行うなど、省力化にも取り組んでいます。年々面積を拡大し、今年は約17haに作付け。「代掻きを丁寧にしたこともあり、生育は順調。農業法人や振興公社なども関沢地区で稲作を行っていて、昔ながらの入り組んだ田以外はほぼ田植えが再開された。震災後の状況を考えると、再びこんなに田が広がるとは思わなかったね」。



「村は標高が高い分、高温障害のリスクが軽減されるね」。